
ねえ？

Yu-Zo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ？

【著者名】

IZUMI

YU-NO-

【あらすじ】

ねえ？明日もこの世界にいられたって思えるものがある？

ねえ？ 明日も「この世界にいられたらって思えるものがある？

単調な日々の繰り返しの中で、それでも明日が待ち遠しくなるようなものだと、うんざりすること以外何も感じないことに感情の動きが順応していく中で、それでも気づいたら心臓の鼓動が高鳴っているときだとが。

存在意義？ 「ううん。そんな大層なものじゃない。

ただ、明日がちょっとだけ待ち遠しくなるようなもの。

それって、あんたにはある？

「ないよ。ってか、この教室のどこを見回せばそんなのが見つかるわけ？」

「……別に、この教室の中だけってわけじゃないよ」

「あのねえ、あたし達は一日の三分の一をこの教室の中で過ごしてるのよ。周りはあたしたちを高校生としてしか見ないし、それはあたしたち自身だってそんなんだから。つまり、あたしたちの存在価値はこの教室の中にいるかどうかで決められて、私たちの居場所もこの教室の中にしかないってこと。分かる？」

「……分かんない

「ふうん。ま、別にいいけどさ」

「真由美はそれでいいと思つ？」

「さあ？ 別に、居場所なんて他にも腐るほどあるじやん

「この教室の中にしかないって言つたくせに……」

「ん？」

「なんでもないよ

そして、私は真由美に聞こえなによつに床に向かつてはき捨てた。
「嘘つき」

私の質問に、真由美はないつて答えた。多分、私だつて同じ質問をされたら真由美と同じ答えしか出せない。そう、私と真由美は同じ質問に、同じ答えをつけるのに。

なのに、どうして？

真由美はいつも笑つてゐる。

どうして、昨日待つてどうしきもなかつた今日を、あんたは笑つて過ごせるの？

私とあんたと、なにが違うの？

私には分かんないよ。

おかしくなる。

率直な感想だつた。

私はおかしくなる。

でも、真由美に言わせればそこが私の居場所だつた。

整然と並ぶ席。参考書で埋まる机。前には少し猫背氣味の華奢な背中。右も左も、後ろなんてなにがあつても見たくない。

話し声に紛れて、シャーペンをノートに押し付ける規則正しい音が聞こえる。耳をふさげば、まるで意思でも持つてゐるみたいにそれは私の中に入つてくる。まるで、せせら笑うよつに。

決まった時間に、決まった席で、決まったことを繰り返す。まるで、機械仕掛けの人形みたいに。そして、私はうんざりして顔を上げる。

田を向ける先はいつも右斜め前。そこには、表情には出さなくても、面白そうに私を見る真由美がいる。

おかしくなる。

率直な感想だった。

私はおかしくなる。

私は真由美がうらやましいのだろうか？ 時々そんなことを考えているときがある。もちろんそれは私の意思でそうしているには違いないけど、決まってそれは私の意思の届きにくい意識の一番端っここのほうで勝手に話が進んでる。だから、私は気がつけば、知らないうちに進んでいる話の中に割り込んで、勝手に答えをこじつける。そんなはずない って。

いつか、私の気づかないところで、知らないうちに別の答えに行き着く日が来るのだろうか？ でも、それは私にとっては何よりも耐え難いことで、それでもそれは、そう遠い先の話でもない気がしてたまらない。

だから、そんなはずない、と答えた直後にはそのことを考えないように意識を集中することが癖になつた。いつの間にかその直後には真由美を視界の中心に留めていることも一緒に。

そして、決まってそんなときには、真由美はいつも向つている。おかしくなる？ ううん。

私はもう、おかしいんだ。

「はあ？」

親、兄弟、先生、etc……。みんながみんな馬鹿面して「はあ？」と聞き返してくるのにうんざりしてたけど、正直、真由美のその反応は私にとっては唯一の救いのように思えてしょうがなかった。もちろん、真由美を驚かせることができたのがうれしかったというのもあるけど、真由美だけは馬鹿面をせずの「はあ？」だったので、なぜか私は救われた気がしたのだ。

「あんた、正気？」

伺うようなまなざしのちよつと上を、不自然にそりあがつたまつげが何度も上下運動を繰り返す。真由美は目をぱちぱち開いたり閉じたりしながら、呆れた、と言いたい気な顔を私に向けていた。

「もちろん、正気だよ。もう、親にも先生にもその意思は伝えてる」そう言つて真由美を見つめ返すと、真由美は斜め右上に一度視線を逸らしてから、すぐに私に目を戻して「それってさあ」と声を出した。

「もしかして、いつか私に聞いてきたことに関係してるわけ？」

「存在意義？」

「そうそつ。明日もこの世界にいられたらいつて思えるものがある？」眉間にしわを寄せて、真由美はいつか私が質問した言葉を口にした。私は別におかしくもないのに笑つて見せて、真由美もおかしくもないのに笑つてみたいたつた。

「決め手は私の答えつてわけ？」

「かもね」

「ふうん」

「ねえ、真由美。だから、私あんたにどうしても伝えておきたいことがあるの」

「なに？」

「うん。私ね」

私は内からこみ上げてくる何かをこじらせて、必死にひざの上に置いた拳をぎゅっと握った。無理やり密着させた手のひらはすぐに汗ばんで、そのじつとした不快感は、私の中に潜む何かに似

ていて、私は耐え難い吐き気につばを飲む。

整然と並ぶ席。参考書で埋まる机。前には少し猫背氣味なうん、今はじつと私の答えを待つていて、ほとんど作り物のきれいさを備えた真由美の顔がある。

飲み込んだつばが、ゆっくりと私の喉を通り過ぎる。そして、私はひざの上で固めた拳を解いて、こみ上げる何かに従つた。

「私、あんたのこと大嫌いなの」

「ないよ」

その答えを聞いたとき、私は、もう認めてしまつていた。

私は真由美がうらやましいんだつて。

どうして、私は真由美じやなかつたのだろう。

どうして、私は真由美になれなかつたのだろう。

どうして、私は？ どうして？ どうして？

私は真由美と同じ顔を持つてゐるのに。同じ声を持つてゐるのに。同じ体を持つてゐるのに。

私たちは、同じ双子なのに。

どうして、私は笑つていられない？

そんなの、もう分かりきつてるじゃない。

そう、あんたよ。

真由美。あんたがいるから、私は笑つていられないの。

だから、私は急に学校を辞めると言い出した。だから、私は何日も飲食を避けて、何キロも体重を落とした。だから、私は誰かれか

まわす「ねえ?」と質問を繰り返した。

明日もこの世界にいられたらって思えるものがある?

すべては、私がおかしくなったとみんなに思わせるため。それは、内から溢れてくる押さえようのない殺意の矛先を、私以外の誰かではなく、私自身に向かわせるため。私が死んだとしても、その予感を誰もがあらかじめ知っていたと感じさせるために。

そして、すべては私が真由美に成り代わるため。

気の遠くなりそうな時間の中を成長し続けてきた殺意は、私に真由美を殺すことを望んでいる自分をようやく自覚させてくれた。そして、私は、自覚したその殺意に吐き気を感じることはあるても、その次の瞬間には真由美に成り代わった私の未来に胸を躍らせていく。

そう。私は今日、真由美を殺す。

そしてね。

「なんか、暗いなあ

数枚の原稿用紙から顔を上げると、真由美はしかめた顔を私に向けて、そう声を出した。

「っていうかさ、この話の中の真由美つてもしかして私?」

不満げな声を出す真由美に、私はあいまいに笑って肯いてみせた。その不満は、おそらく、ほとんど作り物のきれいさを備えた真由美の顔、という部分なのだろう。ただ、これは本当のことなのでしょうがない。すっぴんの真由美は、はつきり言つて目を覆いたくなるぐらい不細工なのだ。

「それにしても、あんたにこんな趣味があるなんて知らなかつたな

そう言つて、真由美は原稿用紙を机の上に放つた。原稿用紙は何か体の半分を机の上に留めて、地面に落ちることを免れた。

「別に趣味つてわけじやないんだけどね

「ふうん。ま、別にどうでもいいけど。この、そしてね って
何なの？ なんかす」い中途半端だけど、まだこの先あるんでしょ
？」

「うん。今考え中だから。できたら、また読んでみてよ」
「うん。まあ、別にいいけど」

真由美の声をさえぎるようになり、チャイムの音が教室の中に響き渡
つた。真由美は、肩をすくめると、私の右斜め前の席に戻つていっ
た。

私は原稿用紙を机の中に忍ばせると、誰にも気づかれないように音
を殺して、それをびりびりに破いた。

整然と並ぶ席。参考書で埋まる机。前には少し猫背気味の華奢な
背中。

おかしくなる。

うんざつして顔を上げる。右斜め前。自然に向けた視線の先には
。

私は、おかしくなる……。

そしてね 。

私は今日、真由美を殺す。

殺す前に、あなたにこれを読んで欲しいの。

ねえ？ 明日もこの世界にいられたらって思えるものがある？
単調な日々の繰り返しの中で、それでも明日が待ち遠しくなるようなものだとか、うんざりすること以外何も感じないことに感情の動きが順応していく中で、それでも気づいたら心臓の鼓動が高鳴っているときだとか。

存在意義？ ううん。そんな大層なものじゃない。
ただ、明日がちょっとだけ待ち遠しくなるようなもの。
それって、あんたにはある？

私はもう、手に入れたよ ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285a/>

ねえ？

2010年10月8日15時20分発行